

人工採苗アワビの標識放流試験

(昭和50年度放流)

中西 広義・平野 忠

試験場所 八戸市鮫町大久喜

試験期間 昭和50年8月～9月までの1カ月間

試験方法

昭和46年10月に当センターで人工採苗し、昭和50年5月28日から8月5日まで八戸市鮫町大久喜アワビ供給施設で、大久喜研究会により中間飼育した稚貝、1,343個体(30mm～76mm、以下4年貝と略称)を8月6日に大久喜地先の岩礁地帯に放流した。これらの4年貝のうちステンレス標識をしたものが1,143個体、タキロン針金が198個体である。標識放流稚貝の殻長組成を第1表に示す。

第1表 殻長別標識放流数
(ステンレス標識)

殻長	放流数	殻長	放流数	殻長	放流数	殻長	放流数	殻長	放流数
(mm)	(個)								
30	1	40	55	50	64	60	8	70	1
31		41	48	51	25	61	3	71	
32	5	42	86	52	38	62	5	72	2
33	9	43	80	53	36	63	3	73	
34	10	44	73	54	20	64	2	74	1
35	17	45	86	55	26	65	2	75	
36	14	46	56	56	14	66	1		
37	36	47	74	57	14	67	2		
38	36	48	60	58	13	68	2		
39	39	49	63	59	13	69	1	計	1,143

(タキロン針金)

殻長	放流数	殻長	放流数	殻長	放流数	殻長	放流数	殻長	放流数
(mm)	(個)								
30	1	40	15	50	4	60	2	70	1
31	1	41	9	51	4	61	1	71	
32	5	42	10	52	3	62	1		
33	9	43	8	53	4	63			
34	9	44	2	54	1	64			
35	19	45	12	55	3	65	1		
36	13	46	9	56		66			
37	13	47	7	57	1	67			
38	11	48	6	58		68			
39	9	49	4	59		69		計	198

追跡調査は9月6日にスキューバ潜水により行なった。第1回調査では(1m×1m)枠により、浅い所(水深1m)と深い所(水深5m)の各1ヶ所の枠取りを行ない、枠外では無差別に採捕した。今回の調査では放流後30日間という短い期間なので再捕貝の測定は略し再捕率だけをみた。

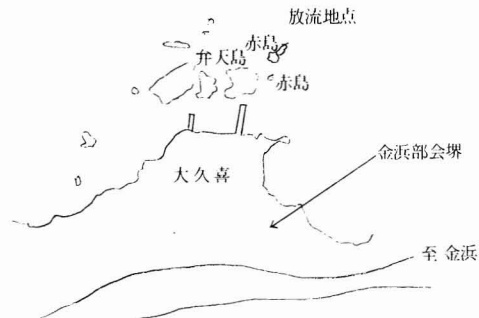
試験結果

放流地点を第1図に示した。

岩礁地帯の底質は大型な岩礁でところどころに大きなくぼみがあり干潮時には露出する部分もある。

海藻類では、ワカメ、チガイソ、アカバの繁殖地で天然アワビの生息している地域でもある。

枠取り(1m×1m)は浅い所と深い所の2地点で行なった。その結果を第2表に示す。



第1図 放流場所

第2表 枠取り結果

調査場	水深	底質	生息植物			生息動物			放流貝	天然貝
浅い所	(m) 1.5	岩礁	ワカメ チガイソ	16本 21本	360g 890g				0個	2個
深い所	6.0	岩礁	ワカメ アカバ	18本 —	480g 75g	ムラサキウニ イトマキヒトデ ヒメエゾボラ	2個 7個 —	120g 110g 15g	0	0

(1) 枠取り、枠外の再捕個体数と再捕率

枠取りによる再捕個体数は天然アワビ2個だけである。

枠外で再捕された標識アワビは、ステンレス標識74個体、タキロン標識12個体の計86個体で再捕率はそれぞれステンレス標識(74個/1,143個)÷6.47%、タキロン標識(12個/198個)÷6.06%で放流数全体の再捕率は6.4%と低い値であった。

考 察

大久喜地先は天然アワビの多く生息している場所である。しかし年々アワビ資源の減少が目立つ資源維持のため、今回、当センターで人工採苗したアワビ稚貝1,343個体(30mm~75mm)の大型アワビ稚貝を用いて標識放流試験を試みた。放流後30日という短い期間にもかかわらず再捕率は6.4%という低い値を示した。標識別にみるとステンレス標識、タキロン標識ともだいたい同じ再捕率である。

前回(人工採苗アワビの放流試験)に述べたように大型稚貝ほど再捕率が良いという結果を参考にし大型稚貝を用いたが再捕率が悪く、考えられる原因として大型稚貝ほど移動が大きいものと思われる。これらを考慮してこれからの放流試験を進めてゆきたい。